

第1回「学び」の選択肢拡大に向けた検討懇話会

日 時：平成27年 8月23日（日）14:00～16:30

場 所：YUITO ANNEX（ユイト アネックス）8階 会議室
（東京都中央区）

出席者：安藤委員、貝ノ瀬委員（座長）、加藤委員、鈴木委員、
西口委員、藤沢委員、鈴木知事

はじめに

●鈴木知事

- 2期目の選挙を通じて、県民の皆さんから、三重県における教育や人づくりを頑張ってもらいたいというたくさんの声を聴き、この4月から2期目をスタートさせていただくにあたり、特に教育の部分、人づくりの部分に力を入れていこうとした。
- 政治の役割はその地域に住む人たちの希望を作ることであるとするならば、子どもたちや若者というのはそれ自体が希望であるから、彼らの希望がしっかり叶うような場所にしていかなければならない。また、希望を持って地域のために活動する人々、そういう人が増えていくことで地域が活性化していくということだから、やはり希望が叶う、そういう教育環境であるべきだと思っている。
- 三重県には、子どもたちが、学ぶ環境がない、学ぶ場所がない、学ぶ内容がない、あるいは学びたいけれど制度的に多様性が担保されていない、そういうことがたくさんあって、残念ながら子どもたちや若者たちが、本当は三重で学びたいのにと思いながら、県外などにその学びの場を求めざるを得ないケースがある。三重県の多様な子どもたちや若者たちの学ぶ場や学ぶ制度、学ぶ内容、あるいは手法、そういう様々な場を準備することで、三重県が多様な教育の場としての役割を果たし、子どもたちの希望を叶えていきたい。
- この会の委員には多様なメンバーに入っていており、こんなあったらいいとか、具体的にはこういう場があるともっと三重県の子どものたちや若者たちの教育環境に幅が出るのではないかと、もっとわくわくするのではないかとといった意見、提案をいただきたい。
- 今、教育施策大綱を作っている。これは三重県が行うべき教育や人づくりの大綱で、知事が作るが、その中のキーワードに「毎日が未来への分岐点」という言葉を使っている。大人が1日手を抜けば子どもたちの未来が遠のく、教育、人づくりをしっかり頑張るために「毎日が未来への分岐点」、そんな思いでやっている。この多様な学びの選択肢を作るこの検討会も、そういう子どもたちの毎日の未来への分岐点を左右する、そんな部分を作っていきたい。

資料に関する質疑

○貝ノ瀬座長

- 資料の47ページ、子どものためになる教育が行われていると感じる割合というところを見ると、「実感していない」という層が結構多いが、このあたりどう受け止めているか。

●鈴木知事

- これは、毎年、三重県が実施している「みえ県民意識調査」の中から出ているが、こういう調査をやっているのは当県だけなので、絶対値で比較するのはなかなか難しいにしても、実感していない層がかなりの数あるというのは、政策資源を投入すべきところであり、しっかり人的、財政的資源も投入してやっていかなければならないと思っている。

○藤沢委員

- 私もこのグラフは気になっていて、県民が子どものためになる教育がどういうものと思っているのかという、県の特徴があるなら知りたい。また、運動を全くしていないという学生が結構いて、これも大変驚きで、三重というと結構自然もあるし、そういう環境が起きていることの理由とか、いろんなデータに関しての背景とか根拠、そのあたりはどうか。

◆教育長

- 体力については、普通は全くしない子と部活動を中心にやる子に分かれていたが、三重県の場合は何もしないという子が増えてきていて、特に女子生徒が多い、そういう特徴的なことがある。これはやはり就学前からやっていく必要があるのではないかということで、保・幼・小含めて継続的にやっていく体験活動が大事ではないかというようなことを、今、取り組み始めようとしているところ。

○西口委員

- 現在の勤務校では、休み時間になるとものすごく運動場へ出てよく遊んで、鉄棒でぐるぐる回るような子がたくさんいて、驚いた。でも、そういう子もいれば、全く外へ出てこないという子もいるという実態がある。二極化している。

○安藤委員

- (資料の47ページの背景について)「子どものためになる教育」が、本当に教育環境として不足しているのかどうかはわからない。環境が悪いという他責に持っていく風土に目を向けて、人を巻き込みながらその人の感じ方を変えていくというアプローチも要るのではないか。

●鈴木知事

- 因果関係や相関関係があるかどうかかわからないが、例えば三重県は通塾率が高い。もしこれが学校に対する信頼とかがあまりないというようなことであるなら、もっと開かれた学校づくり、例えばコミュニティスクールを中心とした開かれた学校づくりがもっと進んでいけば、もうちょっとこういう数値も上がってきたりするのかもしれない。開かれた学校づくりがまだまだ道半ばであるというのも一つの原因なのかなと思う。

○貝ノ瀬座長

- 今の知事の発言と関連して、そのすぐ上の資料だが、例えば学校を助けるような活動の参加意欲を見ると、参加したくないと思っている人の割合が全体で34%。意外と多い。だからいろいろ実感していないという割には、あまり参加したくないと。要するにあなた任せというか、そういう点がある。

○加藤委員

- 体力のことで言うと、私も今、娘が中2と小2で、静岡県菊川市という田舎に住んでいるが、感じることは、田舎で安全に遊べる場所がない。毎日、不審者とか大きなイノシシ出ましたとかのメールが学校から入るし、特に女の子たちに2km離れた友達のところで遊んでらっしゃいとはちょっと言い難く、働いていると送り迎えもできず、家で待ってなさいということが往々にして起こっているのが現実。そういう意味では自由に遊べない状況にあるというのが田舎。都会よりも田舎のほうが遊べない。

各委員意見

○安藤委員

- 私は本当に親がしっかりせねばと思うことがある。すぐ感情的になったり、むきになったり、親の欲求不満、わがままで、子どもを好きなように、あるときは支配したり、あるときは放

任したりする。今は人とつながらなくてもそこそこ生きていけて、自分の親ともう一回向き合って話をするとか、自分の過去の怒りに目を向けるとか、原点＝自分を見つめず、ある程度無意識に生きている。つまり子ども時代に受けた傷で自分を無力に感じ、親になって力を持ったから、その分、子どもに対して力を誇示するかたちになったり、それが子どもを非力にしている場合がある。あるときは攻撃したり、またあるときは過干渉になったり、そのような現状もあるような気がしている。

- むらから個、個立家族でわがままが通用、核家族化、第三者の目がない。
- 9歳までの子は自我が芽生えておらず、どうであれ親、大人を信じるが、10歳を超えて自我が芽生えて親に離反し始めても、親は「なに、私に逆らうのか」と、強力な支配で自分を信じ続けさせたりする。それは親自身が自分の有力感を感じていたいからで、それをやればやるほど、子どもの非力感、無力感、絶望感につながっていくこともあると思う。また、支配不能になってきた子どもは、放任し、夜中に出ていっても、何時に帰ってきたか知らず、もうご飯も自分で食べておいてくれ、となる。
- 方策1は、家族×第1次産業×三世代×むらというような生活モデルを提案して、その生活モデルを実現しているところに対して生活助成とか税制優遇とかを行うもの。
- 方策2は、「農業教育立県」を目指し、第3セクターを作る。田舎のモデル地区に古くて新しいむらを作る。そこで子どもの元気道徳心が育まれる。親も人としてまわりと繋がって元気が出てくる。親も一生、親として学べる充実した環境という「学びの桃源郷」。でも離島や東紀州にはそういうのが既にあるぞと、でもなぜ人は住まないのか。イオンがない、物資のインフラが悪い、不便だと。習い事もいいところがないと。やっぱりわかるけれど人間教育の魅力はあるけれど、生活環境として不便だということに住まないという人もいるだろう。だったらそこにそういうものを用意して、整備していけばいい。「学びの桃源郷」というモデル地区、第1次産業×生活もそんなに不便ではないよ、というような支援。
- 方策3は、子どもに学校教育を受けさせる義務だけではなく、それに「親学を学ぶ義務を付け加える宣言」をすればどうかということ。その義務を遂行したという証やエビデンスがあれば、学校納付金や給食費などの自己負担金の行政補助をするなど。
- 方策4は、親の自己探求ワーク。30代、40代、自分をまず一度見直そうというワークで、その自己探求ワークをやれば、子育てライセンスを発行する。ライセンスを取得した人は、県がそのプロジェクトに賛同した提携店で割引クーポンや、県単の子ども手当を支給する。
- 方策5は関市の事例だが、夜間スマホ禁止ということ。学習との相関は顕著で、学調の生活調査にも相関は見てとれる。
- 方策6は、県民運動で網をかける。文部科学省の「早寝早起き朝ごはん」ではないが、「一日5分は親子の会話・親はときには謝ろう」と、「支配、支配で上からいかないでおいこう」というようなメッセージを含んでキャンペーンでやるということ。それから、親の気づきを促す映画を三重県で作る、あるいは民間製作を支援後援する。さらに、親の気づきを促すカルタ、群馬県の縄文カルタのようなもの。そして、「子育ての手引き」。自治体もやっており、文部科学省や日本PTAでも既存のものがある。9歳までは親の価値観をそのまま吸収する。10歳を過ぎると違和感も覚える。それを支配、あるいは放置して、子どもは非力、無力感を覚え、自尊心が傷つく。まず家庭教育ということで、これらを提案した。
- 次に、社会教育の観点では、県立の藩校、江戸時代の藩校みたいなもの、エリート教育、地域を背負って立つ人材育成としての藩校を作る。学力だけでない総合選抜を行って、夢・志・語学・愛・勇気・見聞・経済・交渉など、いろいろな部分を学ぶ。いつ学ぶんだという

のは、土日なのか合宿なのかちょっとわかりませんが、選抜をしてエリート教育する。それを例えば第3セクター、県民出資で支援する。通学か合宿か、形式はさておき、強制退学もある。藩校の学費やそこを育てていった子には中高大学も県負担、要するに学費を出す。その代わり、自ら学んで手に入れた力というのは故郷の未来に生かしていくのが条件。サッカーなんかでもよくできる子は津トレセン、鈴鹿トレセン、もっとできる子は県トレセンとあるが、藩校も津とか鈴鹿とか、優秀だったら県の中央、津に出てきてみたいということで、いろんな段階があってもいい。

- 人材流出を防ぐ観点で、教育型の三重ブランド保育園を拡充する。長野の「森の保育園」ではないが、三重にはこんな魅力的な保育園の一つのブランド、モデルがあると。その認定園には県の補助を出す。
- 次に、首都圏学生と地元企業との交流会。これはUターンの話。それから、特別区を設けて、有名大学のキャンパスを誘致する。
- かつての公民館使命であったかも知れないが、県立の親カレッジや人間カレッジ、そういったもの。
- 高校入試の話。例えば数学ができる子というのは、通知表がとても悪かったり、非常に数学はよくて、理数系は強いが音楽がすごく悪かったりとか。そうすると内申が悪いから進学校は厳しいみたいな話になる。如才なく上手にやる子は通知表がいいから上に行くけれど、すごく数学がいいという子は通知表がすごく悪くて、公立の一番いいところには仕組み的になかなか行きにくいとか。内申書というのはある学校には非常に重視してもいいけれど、ある程度、偏差値60とかなってくると、内申書にはそもそも教員がちょっと気になることを書くぐらいの話で、あと要らないのではないかと思う。

○加藤委員

- 静岡県菊川市で農業シンクタンクと称して流通と、あとはコンサルみたいな、コーディネーターみたいなことを農業を軸にしてやっており、教育も子どもが2人いるので、すごく興味があって、そんな関係で教育関係の委員も2つほどやらせていただいている。
- 子どもたちを見ていて、例えば私の子どもであれば、私が夢を追いかける仕事をしているので、夢って大人になっても追いかけていいんだという、それがちょっとずつ努力することで実現するんだという、そばにお手本があるのは非常にいいことかなと思う。最初3年ぐらい、自分の夢のためにお留守番させているのってどうなのかなという気持ちがあったが、上の娘が小学校2年生ぐらいのときに、私も社長になりたいと言ったことで、それでもう全ての罪悪感というのは取れて、ああ背中を見せればいいんだと。それ以来、2人目もそんな感じで仕事は理解してくれて、協力もしてくれて、家族みんなで仕事している感じになっている。
- 教員は子どもの一番身近にいますので、どうやってわくわく仕事をしてもらうのかというのは結構、重要と思う。静岡で言うと、技を持っている人たちが暇になってきていて、60とか65で、でもまだまだ元気という方たちがいっぱいいらっしゃるので、そういう方たちに学校に入ってきてもらって、教員たちが教えるというよりは、地域がもっと教育に関わって、地域の人たちが教える場をどんどん作っていく。放課後に関しても同じ。地域で地域が教育に参加していく機会を作っていくというのが、視野を広げるとか、価値観を広げるとか、何かしら自分のお手本になりそうな大人のモデルに出会うという、チャンスを広げるという意味で、そういう方法はいい。お手本を作るというのと、教員の負担をちょっと軽減して、教員自体がお手本になるというのが理想。
- 私はコンサルするときのコンセプトがあって「農業×any=ハッピー」だという方程式。農

業って社会の礎なので、基本的にいろんな社会機能と相性が良い。掛け算すると結構みんなが喜ぶ事業が生まれ、農業×教育というのはすごく相性がいいとっていて、それこそ農業は、数学、物理、化学、いろいろ細かく言うと、気象学、土木、流体、ありとあらゆる学問をおさらいしないと本当はできない難しい産業。しかも機械とかコミュニケーションもできないと上手くできないので、そういう意味ではすごく総合的にいろいろ学べる。もう極端に言えば、低学年なんか農業だけやっていたらいいと私は思う。それぐらい効果的な学習ができて、体得できる。体でまず感じて、高学年になったときにそれが数式だったり、いろんな学問で頭の整理がついてくればいい。今の子どもたちは遊びもしないし、頭でっかち。それが何グラムぐらいかとか、何ニュートンぐらいかというのが体験していないので数式でしか認識できないと、大人になって、エンジニアになったときに、応用が利かない。そこがとっても大事。やっぱり体験をした後に学術的に頭を整理するというステップをきちんと踏めるような教育というのは大事で、それには農業がとっても役に立つと思う。

- もう一つは、ロジスティックス。田舎にいらっしゃるとわかるように、習い事をさせようにも遠い。全部がバラバラで、仕事終わって6時で、学校へ迎えに行くと6時ちょっと過ぎて、習い事行かせて、お迎えというのを、全部家と習い事の往復でしなければいけない。そんなわけでうちの子にはなかなか習い事はさせてあげられなくてというのがあり、それはたぶん共働き世帯はみんな持っている課題。アメリカに行くとそういうシャトルママみたいな利用法人があって、送り迎えのシャトルバスとか車が走ってやってくれる。学ぶ機会はもしかしたらいっぱいあって、そこを繋ぐロジスティックスがないだけというところも多いのかなと思っている。

○西口委員

- 三重県津市の、津駅から一番近くにある小学校に勤務をしております、私は職業人になってからずっと教員、小学校の現場でずっとやってきて、半分近く教育委員会にも携わらせていただいて今に至っている。
- 学びの選択肢を考えると、自分の中では切り口は2つある。1つは、子どもたちが学ぼうというときに、学びの入口をどれだけ多様に用意できるかということ。もう1つは学びの入口に子どもたちが一旦入った後、その中でいかに子どもたちに合うような学びの選択肢を用意してあげられるかということ。私はずっと教育現場の中にばかりいて、入口の多様性ということにあまり考えが至らずに、入ってきた子どもたち、受け入れた子どもたちをいかにその子どもたちに合ったような教育が実施できるかということを中心に考えてきた。
- 今、小学校では、特別支援の必要な子どもたちが増えており、ほかにも外国籍の子どもなど多様な子どもたちが学校の中にはいて、今まで通り一律の一斉の授業を実施していくことはとても難しい。みんな前を向きましようと言ったら、前を向いて授業ができる、そんなことは本当に難しい時代になってきている。その子どもたちに、いかに対応していくかということ、学校をあげて考えて、日々過ごしている。
- もうちょっと広く教育全体を見てみると、この頃3つ思うことがある。1つはこれだけ就学前の教育がいろいろ話題になっているのに、入ってきた子どもの中に幼稚園にも保育所にもどこにも行っていない、就学前教育を受けずに来る子どももおり、その子に日々関わっていくと、社会性とか、コミュニケーションとか、いろんな子どもたちとどう会話していくかということが、やっぱりずいぶん難しいという実態が出てきた。入口ということで、義務教育に至るまでの教育の重要性を感じた。
- 2つ目は、保護者が日頃よく私のところへ、いろんなかたちで相談に来るが、その相談内容

が、昔だったらいろんな人が教えてくれたであろう細かい内容まで聞きに来るということ。家庭教育の話にあったが、もうちょっとその部分に何らかのかたちで手が差し伸べられないのかということを感じている。

- 3つ目は、子どもたちの帰りというか、放課後の過ごし方がすごく気になってきている。例えば保育所などで過ごしてきた子どもは、家の人が働いている間、保護される場所があるが、小学校1年生、2年生、低学年だと1時から2時の間に帰ると、そのあとどこで子どもが過ごして、どうしていくのか。安全はどうなのか、放課後の子どもたちの居場所、放課後の生活というあたりがものすごく気になって、何かいい方法がないのかということ日々、思い悩んでいる。

○藤沢委員

- 「親の問題」と、「教員の問題」と、「何をどのように教えるか」という点と、そして「評価」という問題と4つお話しできたら。まず親に関しては、私自身、日銀の派遣講師として全国の小学校とか中学校にお金の授業をしに行くが、廊下で子どもに挨拶をすると、教員から、勝手に挨拶しないでくださいと言われる学校があって、それはなぜかと言うと、親からクレームがくるからであるというようなことがある。
- やはり親の問題というのはすごく大きいなということを実感している。実は世界中でダボス会議なんかに行っても実は親の教育というのが議論されている。これをクリステンセン教授というイノベーションのジレンマの先生と話したときに、やはり世界の先進国が効率化というのを目指した結果、何でも効率的に楽ができることが良いことだというふうになってきて、子どもに対しても楽をさせてあげることが幸せなことであるというふうになってきて、これが子どもの弱体化につながっているとのことだった。本来、起こるべきイノベーションというのはするべき良い苦勞をさせてあげて、起こしていかなければいけない。だから一つは農業とかもきつとそういうことなんだと思うが、なんでも機械化するのではなくて、ある程度、苦勞しながら植物と対話しながらやっていくことで、より良い作物が取れる。
- 今、お金のある親たちがどうしているかと言うと、全寮制の学校に入れ始めている。日本の公立学校でも、近くにあるけど、全寮制にしていくとか、半年は共同生活をしていくとか、そういうことで一度親と離す。親が教育しきれないのなら、それなりの人たちが集団行動の中で教育をしていくという、三重県でぜひそういう全寮制の学校を作っていただいたらどうか。
- 2つ目の「教員の問題」についても、教員が、忙しいといつも言われること、親に怒られるということとか、本気で教えたいと思っていない教員も意外に多いと残念ながら思うところがある。年配の教員が増えて若い教員が少ないので非常に心配なのは、将来的にしっかり先輩から教えてもらっていない若い教員ばかりになったときに、ますます教えられなくなってしまわないかということ。教員としての学びとか、人間同士のコミュニケーションの学びとかもできなくなってきている中で、事務作業が増えているのを考えると、教員業として子どもと対峙するところをしっかり時間が使えるように、事務アシスタントを全教員に付けるとか、そういうことも一つ考えていいのではないか。
- あと、Teach For Japanみたいな組織があるので、本気で教えたい、若い人が教えに行くという意味では、大学生が高校に放課後でもいいので教えに行くとか。例えば京都の堀川高校は京大生が毎日来てくれるので、より京大生とコミュニケーションとって勉強して、京大に行く子が増える。三重の中でも大学と高校でそういうコラボをどんどんやっていくこともあるのではないか。何よりも教員の職場環境をいかに改善していくか。本当に教員として必要な

ものを教員も学べる環境をどう作っていくかということで、人事制度であるとか、そこでの役割分担で事務職員をどんどん入れていくとか、コストの問題もあるけれど、そういうこともある。

- 3番目の「何をどのように教えるか」というところに関しては、今、私は、文部科学省の参与をやっていて、文部科学省の中の官民の取組を進めている。役所だけでものを考えていくと、非効率だったり、新しいことになかなか勇気がなくてチャレンジできなくなっているので、役所の中に民間人を入れて一緒に部署を作ったりして、民間のいろんな人事制度を入れてみたり、民間の会議の仕方を入れてみたりというのをやっている。学校の中もそういう環境を作っていくというのを一度考えてみてはどうか。
- もう1つ、証券業協会の金融経済教育支援委員長というのをやっていて、今、証券業協会の職員360人ぐらいいるが、全国の小学校、中学校の土曜授業に派遣している。手を挙げていただいたら派遣できるが、学校が希望しても、途中教育委員会で止まるというのがあるので、ある程度そういうものが学校主体で企業と連携できるようなアローアンスというのを作ってみてはどうか。
- 特別支援教室とか外国人の問題に関しても、子ども同士で助け合うというのをやっていくのもとても意味があると思う。実はあまり英語が喋れなくても子ども同士だと外国人の子たちをちゃんと遊び場に連れて行ったりとか、体の不自由な子とか、知的障害のある子たちを仲間に入れたりと大人より上手にやるので、もっとそこを一緒にやっていけるようなことができたらいいと思う。
- 習い事の問題に関しても、これは奈良県の生駒市の事例だが、生駒も便利ではあるけれど、やっぱり習い事をするのにハイスペックの教員たちがなかなかいないということで、前の市長がやっていたのは世界中のトップクラスのアーティストを年に1回呼ぶこと。たぶん三重県のほうが、美味しいものも食べられるし、伊勢神宮にも行けるし、なのでそういうところの特別ツアーを組みますよと言うと、すごくお金持ちの外国人が来てくれる。私も去年、奈良と京都に外国人30人呼んだが、普通に観光に来たら行けない大仏の台座に乗せてあげますとか、なぜ天皇制というのがこれだけ日本でできて、持続可能な国ができたかという議論を長老と特別にさせてあげますと言ったら、30人ぐらい外国のトップが来てくれた。そういう意味では世界のトップアーティストって、ものすごくスピリチュアルなところもあって、三重県はめちゃくちゃ呼べる魅力があるので、そういうおまけ付で来ていただいて、それで特別ワークショップをたくさんやってあげる。バイオリンやっている子、ピアノやっている子とかにそういう時間を作ってあげて、教員のワークショップもやってあげると、ピアノの先生もそこですごく勉強になるので、実はそれで生駒市は芸術レベルがものすごく上がった。コンクールで優勝する子とかもすごく増えた。
- 授業の内容も先ほどの話の農業もそうだが、何%の食塩水なんて言われても一生使わないので、金利が何%になったほうが実際にローン借りるときに役立つし、そういう算数とかというものと社会の問題を一緒に重ねたようなカリキュラムをもっと作っていただいたほうがよいと思う。
- 最後に、こういったいろんな教育の改革をやるけれど、結果責任に対しては緩いと思う。教育というのは新しい施策を打った後の成果が見えないからだと思うが、そういう意味ではもう少しITを活用して、どの教員がどの学校をどのように教えたかということによって、子どもたちをずっとトラックして行って、どういう高校に行って、どういう大学に行って、どういう就職先に行って、その後どんな人生を送ったかというのを、これからトラックしてい

くというのはどうか。サンプリングでもいいので、子どものトラッキングをしていく。でももしかしたらそれ県でやらなくても、Facebookみたいなどころとかと連携することでもいいと思う。キャリアをトラックしていくことによって、やった教育がどれくらい意味があったかということで、次の世代にもやはり繋がっていくと思うので、そういう時系列の成果を追いかけるのもぜひやっていただいたらいいのではないかなと思う。

○貝ノ瀬座長

- 私は教育現場出身で、15年ぐらい前に校長、教育長、教育委員長、ほとんど教育のほうばかり。校長のときのこと、校庭の端のほうに大きな銀杏の木があり、秋になると実が落ちる。子どもたちが外で遊んでいると、臭い臭いとか言って寄り付かない。だけど、ある教員と話し合わせて子どもたちに観察させた。臭いんだけど夕方になるとお年寄りたちがどこからともなく現れて、それを手袋して袋に入れて持って帰る、あれはいったいなんなんだということ子どもたちにちょっと考えさせて、どうもあれは食べ物になるらしいということに気付かせた。そして、処理すればあれは本当においしいお父さんのお酒のつまみにもなるし、おかずにもなるし、商売にもなるという、そういう話で、授業の中に取り入れてもらった。結局、せっかくだけでなるんだからそれを使って販売できないか、それはいいということで、近くの信用金庫から支店長に来てもらって、5千円の資本、借用書の作り方を教えてもらったりして、それで会社を設立して販売しようという話になり、クラスの中を販売部だとか、営業部だとか、そういう役割分担をして、話し合いながら、最終的にはきれいにパッケージして、そして外で駅前の方で売った。親たちには買わないでと言って、売れなければ売れないでどうして売れなかったかと考えさせたり、そういうことを5年生だったが、やった。つまりアントレプレナーシップ教育。小学生でも会社、疑似的なものだが、やろうと思えばできる。
- そういうことを校長のときに実感したので、学校でとにかく起業するというふうなことを、総合的な学習時間という幸い何に使ってもいい時間があったので、それを全部使って1年間でやった。1年生からカリキュラムを組んで、1年生の子は公園の使い方とか、そういうことから始まって、だいたい5年生ぐらいから会社を設立。そういうふうなことができると考えて、教育長になったときに市内の学校全部に、小学校、中学校全部カリキュラム作ってもらった。小と中でやって高で起業の教育を自分たちでやったら、たぶん大学に行かなくても商売というか、起業できるのではないかなと思う。だから私は、アントレプレナーシップ教育、起業教育、そういったことを積極的にやるということが、やはり地方創生の観点からすると非常に大事ではないかなと思う。豊かな自然があるということは、いろんな材料がいっぱいあるわけなので、そこにちゃんと着目させて、そしてそれを例えば今まで弱みだと思っているものを、どう強みに変えられるかというのが私は学びだと思う。
- そういうことを考え、体験させていく中で、例えば農業が先ほど話に出たが、農業についてもICTを活用したり、それから英語力も身に付けていけば別に何も都会を相手にして農業をしなくたって、世界中を相手にして農業をすることもできる。だから都会に出なければ仕事がないとか、誘致しなければ仕事がないではなくて、自分でここでとにかく工夫して、いろんな自然、豊かな自然とかいろんな材料をいかにして強みに変えて、そしてそれを仕事にしていくかと、社会貢献できるかと、そこそこ食っていけるかというふうなことを考えさせ、実行させるのが教育ではないかなと思う。
- それからいわゆる共同生活。特に地方などは、学校の統廃合をやらざるを得ないところがどんどん増えてくるので、そういうところはどうしてもセンター校みたいなのを作ると、結局、

皆さんスクールバスかなんかで通う。片道1時間半とか、2時間のところもある。そういうところは寄宿舎付の学校にしてパブリックスクール、いわゆる日本のパブリックスクールをそこに作ったらいいと思っている。ハーローやイトンとかと同じように。ある意味では舎監が非常に大事になるが。結局スマホの問題にしたって全部解決する。読書の時間にしたり。端的に言えば24時間一緒に生活するわけで、それはもう子どもたちと一緒に生活し、話し合いながらやる。そして結果的に言えばエリートの育成と言われるかも知れないが、都会にだけ偏差値が高い人間が集まっているわけではなくてみんな遍在しているから、地方でこそそういう機会をチャンスを作ってあげれば、私は大変な人材が輩出していくと思う。統廃合するようなときには思い切ってそういうふうに補助して、そしていわゆる日本版のパブリックスクール、三重県版のパブリックスクール。やっぱり突出した子どもたちについては、それなりの教育を保証するというのもあっていいのではないかと思う。

- それから家庭の教育力なんかはコミュニティスクールだと思う。保護者もそうだが、やっぱり地域社会の人が学校の教員と一緒にコラボレーションして教育を作っていく、そういう仕組みがあるほうが学校の中のいろんな課題とか困っていることとか、実態なども地域の人が知ることになる。課題を情報共有するという事は、結局のところ信頼関係がそこで生まれてくる。地域の人にどんどん入ってきてもらおうと、一定の緊張感が学校に生じるから、教員も教材研究なり、しっかりと教えなければというふうな雰囲気にもなってくるし、どこの側面から切ってもコミュニティスクールというのは非常に有益だと思う。

○鈴木委員

- 私の博物館にかつて医学文化館というところが持っていた医学コレクションがあり、その医学コレクションを集めたのが岡本道雄さんで、岡本さんは、医学部の教員で、臨教審でゆとり教育を作ったときの座長だった。岡本さんに生前お会いすることがあり、ゆとり教育の話になった。岡本さんが言っていたのは、ゆとり教育自体の精神は悪くなかったし、今後そうあるべきだと。いわゆる自分自身の力で考える子どもたちをどう作り出すかというのは、これは変わらないテーマなんだと。ただそれを実施するにあたって、郷土愛を入れられなかった。つまりいきなり子どもたちに世界平和を教えてしまったと。先ほど寄宿舎だとかスクールバスの話が出たが、小学校のときに自分のうちから学校まで通うその過程の中で、四季折々の地域の変化だったりとか、おばあちゃん、おじいちゃんに挨拶をしたりだとか、その中で地域に対する郷土愛が生まれてくると。そこを立脚点として自分の地域に対する愛情、いわゆる自分の概念を広げていくんだと。スクールバスで通って、うちと学校しか往復しない、地域のことを教えないというのでは、その子どもたちは郷土に愛情を持つだろうか。いつか郷土に戻ってくるだろうか。岡本さんが言っていたのは、やはり立脚点もまず小さな子に郷土愛というかたちできちんと作って、その延長上に世界平和があるということ。人を愛する心、それはだからおじいちゃん、おばあちゃんに挨拶をする、道草をしてタンポポだとか魚を捕るという中から生まれてくるものだろうと。それを教えられなかったのが失敗の原因だったと思うと。これからの教育の中には、ぜひ郷土愛を。郷土愛という言葉自体がいろんな思いを含んでいるので、先生の時代にはそれをことさらに言うことは難しかったのかも知れないが、やはりそういう時代にもうなっていると思う。私はやはり寄宿舎にしる何にしる、郷土愛という地域を愛する心、自分たちの地域を子どものときにきちんと教えるということがやはり一番重要なのではないかと。これが1点。
- 日本の教育システムの話。江戸時代、明治維新以降の日本の近代化がなぜ成功したか、その理由の一つとして日本の識字率の高さが挙げられる。なぜ識字率が高かったか。貧乏人はな

ぜ学校に子どもたちを送ったのか。今、アフリカとかで学校を造っても、学校に行かない。親がやらない。貧乏だと学校に行かせるより働いたほうがいいわけなので。なぜ日本だけが寺子屋を作って、どんな貧乏でも行かせたか。識字率は江戸とかそれで地域でばらつきはあると思うが、女性も含めても7割、8割いていたという統計もある。なぜそれほど高い教育システムが社会全体として成り立っていたのか。それは読む本があったから。先ほどの医学の話だが、水戸光圀が江戸時代の1693年に「救民妙薬」という本を作る。これは貧乏だとか山奥にいる人たちは医者にかかることができない。そういう人がそのへんに生えている野草、この薬を使えば病気のとき助かるよという、こういう本をまとめて、いわゆる貧乏だとかそういう人たちのために、穂積甫庵という自分の御殿医に命じてそれを書かせて無料で頒布する。殿様がそういうことをやるので、当然、学校も作らせる、読ませなければいけないので。学校も作るし、学者たちも殿様がそういうことをやるから、例えば中国の「本草綱目」とかを全部、あれは漢文であるが、漢文は他の人は読めない、だから日本語にする。岡本一包という人がいるが、この人は後世派という漢方の医者であるが、徹底的に漢文を中国の古典原典を日本語にし、それによって誰もが知識を日本中で知ることができるようになり、漢方医がどんどん増えた。「解体新書」についても、徳川吉宗が洋書の解禁を行って、50年経って、一般的にそういう蘭学を読める人たちが社会に出てきて、杉田玄白としてはその本を読んだ。これは素晴らしい本だと。これは絶対翻訳してみんなに知らせなければいけない。こんな文化を持っている国は日本しかない。自分だけが権威を欲しいのであれば、オランダ語は自分しか読めなくて、その知識は自分のものだけにすればいいのだから。ところがそうではなくて、翻訳文化が既にあり、それを翻訳して社会に出す。読める本があり、読めば役に立つので、みんなが学校に行く。こういう関係性を日本は既に持っていたということ。

- もう一つ言えば、江戸時代の学びのやり方というのは、寺子屋に行っても年長者であったり、先へ進んだ人たちができない人たちを教えるという中でやっている。つまり自分がわかったときの喜びをそのままストレートにわからない子たちに教えるという、教える喜び。教えていけばわからないことがもっとよくわかるということ。今の子たちというのは教える側と教わる側がはっきりしており、問題を作る側と解く側がはっきりしているが、江戸時代の学びの仕方、それがたぶん日本に最もあったやり方をやってきている。欧米以外でアジアの国々で、母国語で最先端の科学技術子どもも含めて理解できる国、教員が全部それを翻訳してくれるのは日本だけ。その長い翻訳文化だとか日本の作ってきた制度に、欧米の優れたものは上手く取り入れていいけれど、取り入れた上で、向こうが素晴らしいからではなくて、日本としてこういう文化があって、そこにどうしたらもっとよくなるかと考える。そういう学びの仕方、これから教育ではなくて学習というのを中心にするのであれば、やはり江戸幕府が長いシステムの中で培ってきたものを上手く利用しながらやるのが最も理にかなっているし、進めやすいのではないかと思う。

欠席委員の意見

○前野委員の意見（事務局が説明）

- 幸せに生きるための教育とイノベーション、協創のための教育、この2つについて。金、モノ、社会的地位など他人と比べられる財、地位財の幸せは長続きせず、安全などの外的要因や健康などの身体的要因、自己実現と成長、つながりと感謝、前向きと楽観、独立とマイペース、こういった4つの因子で表される心的要因など、非地位財型の幸せは長続きすること。そういった中で皆が自分らしく、前向きに、みんな、アクティブに夢を実現する社

会と、そのための教育が重要との意見。ちなみに三重県では、経済的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさや生活の質の向上を実感できる成熟社会にふさわしい新しい豊かさの実現を目指しており、そのために県民の皆さんにアクティブ・シチズンになっていただいて、積極的に社会に参画をいただきたいと呼びかけているところで、そういった三重県の取組を受けて、前野委員は、この非地位財型の幸せというのは、三重県が「みえ県民力ビジョン」に掲げる新しい豊かさと対応しているのではないか。幸せの4つの因子の自己実現と成長といったものは、アクティブ・シチズンと対応しているのではないかというふうに言っている。

- 次にイノベーション・協創のための教育について。これまでの教育を表すキーワードとして、「一人で学ぶ」「知識の詰め込み」「教員から学生への一方通行」「画一的な学び」「画一的な答え」「おもしろくない」、そういったものがあつた。一方でイノベーションのための教育を表すキーワードとして、「チームで学ぶ」「創造性を育む」「PBL (Project based Learning)」「それぞれの学び」「多様な答え」「楽しい (幸せ)」、といったものが挙げられており、イノベーション・協創のための教育は、自分らしく、前向きに、みんなで、アクティブに夢を実現する社会と、そのための教育につながるもので、幸せに生きるための教育にもつながるとされている。
- 多様なメンバーで多様な答えを求める教育が重要ということで、チームで学ぶ、創造性を育む、PBL、それぞれの学び等々のイノベーションの教育の要素を取り入れた慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究科SDMにおける実践例をもとに、こういったような学びの場、手法を教育の様々な現場で取り入れることを提案された。

○清水委員の意見（事務局が説明）

- 意見は、全部で4つ。1つ目は、「文理融合型の情報科学、情報デザイン学の研究教育拠点の形成」。将来を担う子ども・若者たちにとって、プログラミング言語の習得は、国語、英語の習得と同様に必修の言語である。大学においても、工学部の情報学系で養成している情報科学の人材のみではなく、ウェブデザインや映像・音響デザイン等々を担える文理融合型の情報科学、情報デザイン人材を本県において養成する必要と価値は十分に存在する。要するに県内の大学に新しいタイプの情報学科が必要という趣旨の提案。
- 2つ目も大学教育に関する意見で、三重県にない「学ぶ場」でいえば、外国語学部・学科だということで、創設維持することが十分可能だということ。
- 3つ目は、図書館を核にした教育活性化という趣旨の意見。皇學館大学の図書館に去年eラーニングを導入されたことで、図書館入館者数が前年比33%増とか、文献複写依頼件数が前年度比26%増という大きな効果があつたということ。それを受け、三重県の小中学校にしまして、既にある図書館の利活用を工夫することによって、児童生徒の学習意欲を活性化することが可能ではないか、少子化によって余った教室があるはずなので、第2図書館として整備するなど、図書館活動を通じて学校自身による教育活性化に繋げる試みが重要ではないかと提案されている。
- 4つ目は、「読書推進」による「国語力日本一」を目指してはどうかということ。これには2つ理由があり、1つはあらゆる学力の基礎が国語力にあるということ。2つ目として、三重県が本居宣長をはじめとして、様々なそういう学者を輩出してきた地域であるという歴史的背景からということで、三重県がそういうことを目指す意味が非常にあるというふうに主張している。
- もう1つ、農業と教育の関係が非常に重要だ、大学生も農業体験が重要という意見。実際、皇學館大学は、三重県の農業大学校との連携もされている。

○力石委員の意見（事務局が説明）

- 力石委員は、一般財団法人日本のこころSoul of Japanの代表理事で、主に食文化を通じて日本の文化を日本の次世代の人々に継承する活動と、世界基軸としての日本文化を世界に提唱する活動をされている。
- 意見は大きく2つ。1つは小学生向けのプログラムの開発と実施。あと1つは「食」をテーマとした大学院大学の設立について。
- 1つ目の小学生向けプログラムについて。神奈川県の上野原で小学校時代を過ごし、地域の自然や親とのつながりの中で、国や地域を愛するということがあった。また、英国の留学経験がある教員から生き生きとした英国の暮らしのことや、また英語の勉強をさせてもらった。そういった中で自分を振り返ってみると、こうした子ども時代の体験がその後の生き方に大きな影響を与えており、小学生時代にどういった教育を行うのが重要であり、まず地域をテーマにした小学生向け学習プログラム・コンテンツを県が地域の企業と一緒に開発し、小学校に提供してはどうかという提案。プログラムのテーマは三重に関係の深い「自然」「ものづくり」「エンターテインメント・商業」「食」の4つを挙げ、子どもたちが自然と三重に愛着を感じるようにという内容。プログラムの実施手法としては何か施設を作るという意味ではなく、キッズニアをヒントにしながらやってみようということ。併せて小学校、中学校、高校と発展させていくことも想定した、三重を愛するガイドブックの製作を提案。またもう1つ、あいさつは人と人とのコミュニケーションの一番最初にあるものであり、本来、家庭で教育すべきであるけれど現状は難しいので、学校、特に小学校でしっかりやるべきとの提案をされている。実際にやる場合には、プログラムのテーマの理念、教育目的をしっかりと明確にしていく必要があるとのこと。
- 2つ目の意見は、「食」をテーマにした大学院大学の設立。意図は、三重の若者が県内で学び、職に就けることは重要であり、三重県の特徴を生かした産業振興とそれにつながる人材育成を行うことが必要である。また、大学収容力が全国46位と低く、高等教育機関の充実が必要である。三重には、伊勢神宮もあり、また食材も豊かであることから、三重にとって食をテーマにする意味がある。併せて食を学問的に追及する大学が日本にはほとんどないので、学生の確保につながるような全国への発信力も期待できるという。提案内容としては、米国にあるThe Culinary Institute Of America、CIAと略して言っている、そこを模範とした、食を学問・技術の両面からアプローチする大学院大学を設立するというもの。全く新規に設立するのがなかなか難しいということであれば、県内の大学が協力するようなかたちも含めて検討してはどうかと。なお現在、委員が代表理事を務めているSoul of Japanでは、法人会員を募って「食」のプラットフォームづくりを進めており、この活動の中で「食の教育機関」の設立を検討している。そういったことや、三重県でも大学院大学を支える基盤ともなる「食」のプラットフォームを作ってみようという点にも言及した意見、提案。

各委員意見

●鈴木知事

- いろんな意見をいただき、まとめる場ではないので感想的なものになるが、まず一つは、親とか家庭教育の部分についてどうするかということが大変重要だと。学ぶ子どもたちとか若者が多様な教育を受けられるためにというその前提においても、親とか家庭教育の部分をどうするかというのが大変重要なので、そこについて今後一定考えていく必要があると感じた。
- もう一つは、「多様な教育をやるためには、教育に関わられる当事者が多様である必要があ

る」ということが、たぶん全ての方がおっしゃったことに共通すると思う。民間のことばかり、郷土愛のことばかり、農業のことばかり、様々そうだと思う。コミュニティスクールもそうだが、教育に関わる当事者をいかに多様化するかということが大変重要だなと思った。そのために具体的にどうしていけばいいか掘り下げていく必要があるなというふうに思った。

- 3つ目は、全寮制の関係のところは、三重県も農業ということでは、私立だが愛農学園というちょっと特徴的な教育をやっているところがあって、日本経済新聞とかに取り上げられたこともあるので、その新聞記事なども含めて今度ちょっと事例をご紹介させていただいたら面白いのかなと思った。あと、実はこの懇話会の予算を通すときに、議会からエリート教育をやるのかと質問されたが、全然違いますよと話をしたので、そういう中、全寮制とかボーディングスクールみたいな話が出て、そういうのが何か面白いなと思いつつ気になっていた。
- 最後は、財政的、人的リソースというのは限られているから、優先順位を付けるためにも結果責任とか評価とかというのは大変重要だなと思った。逆に多様な選択肢、多様な教育を担保するためにも、だからこそ評価は重要だなというのを改めて認識した。そういう仕組みづくりも重要と思った。
- あとは今日の最後に言おうかと思ったのだが、収斂しないと行ったが、とは言えこれだけ意見をもらってもったいないので、例えば資料2みたいな感じのアイデア集みたいなものを作ってみるとか、結論を収斂しないものの何かいい感じに、これだけ出たいいことを更に掘り下げたりしながら、世に問うていけるものができればいいなと思っている。

○藤沢委員

- 私が発表した後に伺った郷土愛のお話で大変触発を受けたが、私自身が、幼稚園ではなくて保育所にいた時、しょっちゅう地域の老人ホームに行き、おじいちゃん、おばあちゃんたちと色々なものを作ったりとか、あと神社仏閣にもすごく何度も行かされた。また小学校のときは変わった担任教員で、とにかく週に1回、地域のことをレポートして出せという教員だったので、本当に市役所にしょっちゅう行って、色々な市役所職員の人と色々なものを教えてもらってレポート出したりしていた。これは全寮制の学校だからできる、できない、通っているからできる、できないではなくて、学校教育の中にプラスアルファをどう入れていくかということがものすごく重要だなということを感じている。
- 先ほどの江戸時代の識字率の話はすごくインパクトがあって、要するに貧しい人、地方にいる人たちでも学べる環境を作るというのはすごいなと思って聞いていて、じゃあ現代に置き換えると何かというと、やっぱりeラーニングというのを考えてみなければいけない。ダボスでグローバル・アジェンダ・カウンスルというところに入って、教育の未来というセッションに入っているが、そこでアフリカ人から出たのが、これからeラーニングを活用して自主的に勉強する人がすごく増えてくると。ハーバードの卒業証書は持っていないけれど、ありとあらゆる大学の授業を聞いて知恵を学び、しかもそういう子たちというのは自分の社会を変えたいと思っていたりするから、すごく能力が上がっているはずで、そういう子たちとハーバードの卒業証書を持っている子とどっちを採用しますかと、グローバル企業の経営者たちという質問したことがあって、そのときにグローバル企業のCEOが、これからは卒業証書では人を採用しないかもしれないということをお願いしていたぐらいで、やっぱりeラーニングってすごく活用の価値があると思う。
- 例えば私は、テントというコミュニティに入っているが、ほとんどの翻訳とかはボランティアがやっているのだから、ハーバードとかスタンフォードとかの、eラーニングは全部そうやっ

てボランティアに翻訳していただいて、第2図書館にどんどんビルトインしていくみたいなことをやったら、本当に学びたい子にとってはすごく刺激的だと思う。よくそういう翻訳文化が広がるから日本人は英語しゃべれないんだと言われるけれど、しっかり学んでいく子は最後、自分で勉強して本書に、原文にアクセスしたいと思ってくるので、全員が英語を話せる必要はないし、そういうことをやったらいいと思う。

- いろんな取組をこれからやっていく上で非常に重要なのはコストであり、夢みたいなことやって、結局、財源がないから止めましょうという話になりがちなので、企業とのコラボをどのくらいやっていくか。この間もスカイプの人たちとワークショップをやったのだが、新しい事例だったらスカイプはお金を自分たちが出して、教育の中に入ってきてほしいということを言っている。グローバル企業を上手く使って、ただでいろんなことをやることを考えてみるということと、まさにICTを活用するというこの2つでできるだけコストを抑えながら、最先端のチャレンジをしていくということができたら素晴らしいのではないかと思った。

○鈴木委員

- 今、郷土愛の話が出たので、それに合わせて私も思っていることを。前の安倍第一次のときに経産省から総務省に出向した方が来られて、いわゆる地域の再生をどうするか、アドバイスを聞かれたときに、祭を復活させたらどうかと言った。地域において祭というのは、おじいちゃんがいる、お父さんがいて、息子がいて、孫がいて、女性も含めてそれぞれに役割がある。この役割分担が非常に重要なことで、子どもがステップアップするのは自然となだらかにいくのではなくて、ポンと上がる。だから、昨日までお母さんの後ろを付いていた子が、祭が終わるとお兄さんにくっついて歩くようになる。だから地域において祭というのはものすごく重要な意味を持っている。戦後、日本は祭をどんどん消してきた歴史があるのだが、やはり祭のある地域は実は減びてない。創造性から人材も含めて、福岡にしてもいろんなところ、京都なんかも。だからやはり地域において今、郷土愛が廃れつつあるのは、郷土に誇りもないし、みんなで集まって顔を突き合わせてそういうことをやる場がなくなってきているということ。地域の中でよさこいでもいいけれど、新しい祭をどんどん作っていく中でやったらどうか。実は、明治になって祭というのは全部消されている。おわら風の盆は、大正に作られた祭であるが、それが今や昔から続いているように、あの地域の風物詩になっているという、ああいう祭を作ることが地域をもう一度再生して郷土愛に繋がっていくのではないか。地域のコミュニティも強くなるし、祭というのは、役割があってそれぞれが教えるわけだから、教えるということに繋がるのではないかなというのが一つ。
- それと、日立の人でハッブル望遠鏡に、グレーティングという、外から入ってくる光を偏光するための板を作る人がいた。職人の方でその当時だいぶご高齢だった。グレーティングというのは、世界で日立しか作れなくて、その職人さんしか作れなくて、後釜どうするのかと聞いたら、「今、一生懸命、会社、研究所が手配してくれている」と。「でも中卒なんだよね。小学生じゃないとあの感性は養えないんだよ」と。「だから小学生のときからものづくりのそういったものを教えたい。でもそれは今の日本では無理なんだ」と。私は、塾があるじゃないかと思う。音楽塾、スポーツ塾、何でお金払って子どもたち行っているのか。ちゃんと学んでいる、危険なこともなく。野球でもなんでも危険な行為である、当たれば怪我するわけだから。でもちゃんとやっている。日本ではそういったものづくり塾みたいなものになると、みんな無料でやったりしている。経験がない人が教えたらだめになるから、企業でリタイヤした人がいっぱいこれから出てきているわけだし、ああいう人たち、企業がお金を取って地域の子どもたちに教えるものづくり塾を開いたらどうか。卒業証書でも出して、私は小学校

の頃、こういうものづくりの感性を学んだと賞状を出して、地域の企業で就職するときはそれが役に立つような証書を県が保証するとか、もしくは三重県にある企業がものづくり塾を作る場合には援助をするとか。そうするとOBの人たちは自分の孫たちに教えるのと同じようなかたちになるわけだから、しかも経験があるから、叱っても親御さんは怒れない。もう経験もあるし、怒り方も知っているし、危ないことについてはきちんと文句言えるし、多少怪我してもその怪我がどんなものかは理解できている人たちが教えるわけだから。そういうお金をきちんと取って企業がものづくり塾のようなことをやると、学ぶ喜びなんかも含めてやれるのではないかと。企業にとっても新しい事業である、塾になるわけだから。日本というのは使命感が高いので、特に企業の人たちが海外へ行ってしまうということも含めて、自分が誰かに頼りにされたい。素晴らしい人ほどおそらくそういう意識が高くて、それを教えられる場がもしあるのであれば、三重県が率先してやればどうか。そういうのがもしできればすごくいい塾になるのではないかなと思う。そのカリキュラム作りを県が手伝う。たぶん日本中でもしそれができれば、小さいころにトヨタの会社で学んで、日産の会社に入るだとか、そういう流通ができる。小さいころにそういう子どもの能力を、小学生のときに感性を見つけれれば、すごい人を見つけることになるかなと。明治以来の大学というのは、頭から入るようになってきている。でも今、工業高校でも何でも、ロボコンでも何でも作らせて学ばせるというやり方が流行っている。あれは手からしか入れないということ。やはりそういう小学生のときに手から入れる子どもたちをきちんと能力に応じて見極めてあげる。この2つ、何かできるかと思う。

○貝ノ瀬座長

- ものづくりのこと。三鷹に三鷹光器という50人ぐらいの会社があって、NASAのレンズを作ったりしているが、ここは中卒とかせいぜい高卒までしか採用しない。その入社試験は論文とかではなくて、竹とんぼ。竹を1本与えて、それを削ってちゃんと高く飛ぶ竹とんぼを作れるかどうかというのが入社試験。そういう人たちを集めている。つまり手先が器用とか。私は、大事なことは、先ほどの郷土愛に通じるが、やはり誇りだと思う。プライド。中卒だろうが高卒だろうが、そういう誇りを持って働けるような環境を整える。
- 同時に、教育の場でも、故郷、郷土の良さというものを意図的に教えてあげないとわからない。でも教員は転勤族だから、結局よく知らないでちゃんと教えていないということもあるので、やっぱり教員自身が自分の地域の良さをよく学んでそして伝えるということ。よく災害なんかになると、大雨になったときに80過ぎの年寄りが夜中に出ていって、水路に落ちて亡くなったりすることがある。ああいうのも伝え方によっては、「こんな大雨降ってる夜中に出て歩くばかな年寄りだ」というふうになるのか、「孫たちに上手い米を食わせようと思って、日々世話している田んぼが心配で心配でしょうがなく、夜中に見に行ったら残念ながら亡くなった」というふうになるのかによって、全然、子どもの受け取り方が違う。ばかな年寄りだと言うのか、共感的に伝えるのか。そういう教員自身の郷土、故郷に対する指導とか教育ということは意図的にやっていかないといけない。担っている人たちも誇りをしっかり持って、それを胸張ってちゃんと子どもたちに伝えられるという、そういう場を作ってあげるといっても、やっぱり意識的にやらないとできないのではないかなと思う。

○藤沢委員

- 川崎市は、そういうものづくりの方々に「川崎市マイスター」という称号を与えて、それで事あるごとに格好いいということで市がものすごくプロモーションされて、小学校とかにも送っている。

○加藤委員

- 祭は絶大な効果がある。実際、私が住んでいる地域は、京都の祇園の流れがあって、八坂神社の。七百何十年続く祭を持った菊川市の中でも自治がすごくしっかりしている地域で、全国からまちづくり委員みたいなのが視察に来るような場所なのだが、そこは菊川市が毎年やる豊作の祭りとは別に、神事として3年に1回お祭りを開催する。唯一そこだけが子どもが増えていて、という循環がよく回っている。やはりどうしてもそこに住みたいから、そこで生まれ育った人たちがそこに家を建てたくなる地域になっていく。そこは3世代が祭のために練習にも出るし、準備もするというので、やっぱりお祭りは本当にその地域に誇りとか生むし、子どもたちが赤ちゃんのときから、そのリズムとか熱気とか準備とか、大人たちが動くのを見ながら、その出身であることを伝授されるという意味で、すごく重要だと思う。小学校とか教育委員会も後押しするべき。

○貝ノ瀬座長

- 東京は、戦後お祭りがわりと低調になってしまったのは、学校が協力しなくなってしまった。つまりやはり微妙なものがあって、昔は校庭でお神輿の休憩なんかもした。ところがやっぱり神道だというふうな、そういうような議論が出て、そして校庭の中にやはり神輿の休憩所を作ったらだめだとか。そういうふうなことでちょっと低調になったのだけれど、最近やはり地域力というふうな観点で、学校は音頭取らなくてもいい。今度は地域がやると。例えばコミュニティスクールなどでは、地域の人たちが中心になって、そして学校は協力できるところはしてくれればいからということで、地域主導でやりだしたところは祭が盛んになって、地域力が回復してきている。繋がっているというふうにも実感すると、みんな楽しいから。

●鈴木知事

- 資料4の32ページに載っているが、実は全国学力・学習状況調査の中で学力部分については、三重県は大きな課題があるのだが、「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」という回答、この地域行事への参加というのは、ずっと全国平均を常に上回っていて、次もきっと大きく上回るのではないかと期待している。こういう要素があるので、今の地域との関わりとか郷土愛的なものは、先ほど座長が言っていた計画的、意図的ということについても、三重県は入り込みやすいところだと思う。

○藤沢委員

- お祭りの一環で、サミットとかももっと小中学生に関わらせてあげて、世界的に。

○安藤委員

- 祭は私の言葉で申し上げると、縦軸、横軸がはっきりして、原点である自分の人格がはっきりする。その地域を肯定するだけの気持ちばかりでなく、その地域に住む自分自身のことも肯定できる。そうすると自分の機嫌がよくなって、大人の機嫌がよくなると子どもの機嫌もよくなる。地域の活力、元気が生まれてきて、やろう！という感覚が出てくる。そのようなこととしては非常に重要なこと。
- 塾ができることという、貧困家庭とか、塾に通えないなどの子に対して、放課後や土曜日に学習支援ができるかというところ。
- 先ほどのものづくりの話がされていたが、東大の中邑賢龍さんが不登校とか発達障がいの子も含めて「非常に感性が鋭い子たち」×「先端ロボット工学」みたいなのをやっている。その子たちのある意味尖った感性をここで発揮してくださいというようなこと。そういう場を作るということも面白いと思う。また、衣食住、生活に関わるからこそやっぱり学びの意欲が

出てくる。最初の話にもどるが、農業、第1次産業を中心に据えた生活モデルというのはすごく広い話で、非常に難しいけれど、そういう生活モデルを提案して、そこにいろんなインフラを整備してあげることによって、ここにユートピアができましたと可視化されたら、楽しそうだからやってみようぐらいのところから入って、教え合う共同学習のようなアクティブ・ラーニングなのか、それに応じて指導者側が壇上の賢人ではなくて、平場に下りてガイドするというような研修というものが必要になるのではないかなと思う。

○貝ノ瀬座長

- 今、安藤委員が言ったような民間教育機関とのタイアップというのは、方策に出ているが、大いにあるといいと思う。例えばeラーニングなんか、これはもうしょっちゅう言われているが、効果的。だけど教員が使えない。教えられない。だからそうなったら教員の研修ももちろん大事だけれど、もう民間の人に入ってもらえばいい。一緒にやるというふうなスタイルにして、そして民間のプロに手伝ってもらって、そして子どもたちに力を付けてということになる。そういう意味では土曜学習だってそういうこともあり得るし、その場合も必ずしも教員が土曜日に出勤してやらなくてもいいわけである。民間の方だとか地域の人が補習的なことを指導したり、パソコンのいろんな指導もしたりとか。塾なども一つの社会貢献として何かいろいろ、お金そんなにいただかなくても公教育に協力しますよという気持ちは結構持っているのでは。

○西口委員

- 実は農業の話なのだが、私の学校では、今年、初めて学校の花壇の一部を田んぼに替えて、子どもたちがそこで稲を育てている。わずかな空間だが、泥の中に子どもが入って、田植えをしようとしても自由に歩くことが難しい。そういうようなことからスタートしている。本物の体験をいかに子どもにさせていくかということを、学校現場は常に基本に据えながら教育を考えているが、どうしてもいろんなことが学校に入ってきて、学校だけでしていかなければいけないと当事者としては思いがち。例えば農業もさせなければいけない、ものづくりもさせなければいけない、ICTもさせなければいけない、いろんなことで学校の中が今いっぱいいっぱいになってきているのも現状で、今お話を聞かせていただいて、例えばいろんな民間のところといかにタイアップしていくか、それから地域の人といかに手をつないでやっていくかということが大事だということを改めて今日は思った。教員がこれを教えなければならぬ、いかに上手く教えていくかと効率を追い求めて草食的な子どもたちを作っていないかというような反省もさせていただいたし、これから学校が進むべき道というものもう一度考えなければいけないなと思った。

○藤沢委員

- 教員の役割がちょっと変わってくる。外の人たちの力を借りるとなると、教員は教えるのではなくて、誰よりも教室の子どもたちのことがわかっている人で、場を提供して、サポートする立場が変わっていかないといけないと思う。たぶん常に教える人だとして存在すると、外の力というのは借りにくい。なので、教員に求められる外の力を借りるときの能力って何か、一度整理したらいいかもしれない。

○安藤委員

- 学校教育が社会教育のほうを向いているかどうか。一つの事例で言うと、ラジオ体操であるが、私が子どものころというのは、学校からラジオ体操ちゃんと毎日行きましたかという表があったと思う。今、自分も小学生の子どもがいるが、ラジオ体操はといたら、夏休みの前半1週間と後半1週間で真ん中はないと。地域の大人が主導しているかということ、子ども

たちが自分たちで集まって、おじいちゃんが来て公民館のカギを開けてくれるから、ラジオのボタン押して自分たちでやっている。なんか面白くないなど。子どもたちはいろんな大人に名前を呼んでもらって、毎日行くのが当たり前だった。大人も一緒になって、行けば行くで「朝早いやないか」と言ってもらいながら、自分の存在も認めてもらって、居場所がある地域、コミュニティを実感できるという繋がり感もある場所だったから、寂しいから行くみたいなどころもあった。あそこに行けばみんな集まっているという安心感。ラジオ体操が何でそんなふうに淡白になっていったのか、ちょっと経緯はわからないが、いつからそんな、「社会教育は社会教育、学校は学校」みたいなことになったのかと思う。

○鈴木委員

- 分けなければいけないのは、先ほどの国語力の話。清水委員が言っていたが、やはり基本的なことというのは、詰め込みという言い方は嫌だが、やっぱりこれはきちんと教えないと。嫌でも水辺に連れて行かないと羊は水を飲まないの、やっぱり教えるべきことをきちっと教えた上で、その先は動機付けでいいと思う。例えば、Boy's be ambitiousのクラークさんは8ヶ月しか日本にいなかった。それであれだけ素晴らしい人たちを育てるといのは、やっぱりその動機付けが上手くいったからであって、それはほんの一瞬のふれあいでいいわけである。
- 私たち日本人の感覚として、木は植えたら生えてくると。そういう感性を持っている国というのはそんなに多くない。今、世界でいわゆる自然も含めて、例えば、「やうやう白くなりゆく山ぎは 少し明りて紫だちたる」とある1千年前の文学をずっと見続けてきている国というのは世界でも日本だけ。そういう感性を持っているということに子どもたち気づいていないから農業にいかない。だから気づかせてあげる。動機は、自分たちで見つけさせればいわけで、そういう私たち自身がそれに実は気づいていない。だから日産にいる私の先輩が、やっぱり中国に黄砂が飛んでくるので、自分たちの金で苗木を買って中国で植えている。やっと育ったと思って今年も植えるぞと行くと、みんな羊に食べられている。ある大きさまでなった瞬間に、食べさせられている。向こうの人たちは生えたら食べなければ損だと思ふ。育てるという意識がないわけである。そういう感覚をまず私たちが勉強する場を作る。もしくはそれをきちんと教えられる体制を作る。だから基本的なところをきちんとやった上で、やはり指導者を育てる。一足飛びに何かを作ったら全て丸くいくわけではなくて、基礎的なことをきちんと教えるという体制をやるべきではないかなと。犬山がいい例ですよ。犬山は祭を基本として教育をやることを決めて、あれは前の、西沢さんだったか、市長がそういうことをやっていたわけだから。ああいうことはやはり10年間以上やり続けないとやっぱりいい形はできてこないの、今言った教えるべきことをきちんと教えるのと、その先をどう見るかという2つを上手く分けて、ぜひ体制を作っていたいただければ。

●鈴木知事

- 先ほどICTの話があった。資料4の42ページに、一応、どこまで中身は伴っているかわからないが、三重県の公立学校教員のICT活用指導力は全国トップクラスであるということであり、これもICT教育、強みになるはずというふうに思っている。先ほど来あった、特に鈴木委員が言った感性、特に小学校からのものづくり。私は一昨年、シアトルのボーイングに行ったときに、研究担当副社長に会ってまさにそれを言われて、「感性は小学生ぐらいからやらなければいけない」というので、今、ボーイングがそれをやってくれていて、今度9月に三重県にボーイングの人たちに来てもらって、ボーイングジャパンと一緒に、小学生とか対象にもものづくりの勉強会というか、一部の子どもたちだが、やろうとしており、まさにそう

いうのは本当に重要だなと思っている。

- 藤沢委員も言っていた翻訳の話とかいろいろあったし、祭の話とか兄弟の話もあったが、川端康成がノーベル文学賞を取ったときにストックホルムで演説した内容、美しい日本の中の私というのがあったと思うが、要は雪月花を愛でる気持ちということに加えて、感動したら感動したことを仲間に伝えようということが日本人の美意識の特性だというようなことを川端康成が言っていたと思うが、今日の話聞いてそれを思い出して、やはりそういう伝えたいと思う気持ちとか、感動を共有する気持ちというのは日本人の美意識の大変根幹的なところなので、大事にすることが必要だと改めて思った。

以上